

# 身体の＜響き＞を捉える音風景ワークショップの開発

「アクティブ・サウンドウォーク札幌」の基本構想とプレ事業報告

## Development of Soundscape Workshop for Reserving the Body's "Resonance"

宮 本 一 行\* 1

MIYAMOTO

Kazuyuki

### 要約

本論文は、芸術実践における身体的な行為と音環境の知覚について研究を進めてきた筆者が主宰する音風景ワークショップ「アクティブ・サウンドウォーク札幌」に関する実践報告である。サウンドスケープ思想と従来の音風景ワークショップの形体をまとめるとともに、本ワークショップの基本構想およびプレ事業の内容を整理しながら、身体の＜響き＞を捉える音風景ワークショップの在り方について考察した。本ワークショップは、①サウンドウォークによる探索、②アクション・レコーディング、③振り返りの会、からなる三つのプログラムで構成している。これらを通して、参加者は音環境を「観測者」と「行為者」という両側面から体験し、空間的・身体的な次元でサウンドスケープを捉えるための「身体的な聴取」体験が生まれることを狙った。プレ事業では、札幌市平岸地区に位置する精進河畔公園にて、14名の参加者を対象にワークショップを実施した。また、録音した音声ファイルと独自のオノマトペの創出などの成果物を活用して「アート・ドキュメンテーション」の作成も試みた。本ワークショップの特徴は、参加者を観測者でありながら行為者でもあると意図して位置付けた点にある。そのことによって、参加者が自発的に音を発すること、すなわち環境と共振していく活動を通じて、身体の＜響き＞を捉える音風景ワークショップの一つの在り方を提示することができた。

キーワード：環境と身体、聴取体験、ワークショップ、サウンドスケープ、環境芸術

This paper reports on the "Active Soundwalk Sapporo" workshop, led by the author who researches bodily actions and sound perception in artistic practice. After outlining soundscape theory and earlier workshops, it introduces the workshop's core concept and preliminary project, exploring ways to capture the body's "resonance" in a soundscape workshop. The workshop centers on three programs: (1) soundwalk-based exploration, (2) action recording, and (3) a reflective session. Participants engage with the sound environment as both

---

\* 1 札幌大谷大学芸術学部美術学科

“observer” and “actor,” aiming to develop embodied listening that perceives soundscapes in spatial and corporeal dimensions. In the preliminary project at Shojin Riverside Park in Sapporo’s Hiragishi district, 14 participants collected and recorded sounds while creating original onomatopoeic expressions, forming an “art documentation.” A key feature is the deliberate dual positioning of participants as observers and actors. This approach facilitates sharing perceptions of external and internal soundscapes and prompts each participant to reorient their “gaze” toward their own embodied listening experiences.

Keyword: Environment and Body, Auditory Experience, Workshop, Soundscape, Environmental Art

## 1 はじめに

筆者はこれまで、博士論文「音環境と協奏する芸術実践」<sup>1)</sup>における一連の制作研究を通して、音環境と人間の相互関係について考察してきた。そこでは、自らの既発表論文「里山の音風景から導く環境芸術」<sup>2)</sup>、「残余空間から描き出す環境芸術」<sup>3)</sup>、「土地と身体から紡ぎ出される環境芸術」<sup>4)</sup>などを通じて、芸術実践における身体的な行為と音環境の知覚に関する研究に取り組んだ。また、博士審査作品《雪面の歩行》では、環境の音を外的な刺激として捉えるだけでなく、自己の身体内部に広がる音を触覚的にも捉える様を「ミュージッキング」<sup>5)</sup>に連続する「身体的な聴取」<sup>注1)</sup>であるとし、空間と身体サウンドスケープについても言及した。これまでの作品制作においては、筆者が感じ取るサウンドスケープからインスタレーション・アートを制作してきた。そして、制作した作品は、芸術を環境化させる「環境芸術」<sup>注2)</sup>と見做すことで、音環境に気づきを与える様々な鑑賞体験を生み出してきた。一方で、これまでの制作研究では、音環境と筆者の相互関係に対する言及に偏っていたようにも思える。そこで、これまでの「音環境 ⇄ 作家 → 環境芸術」という制作プロセスだけではなく、「音環境 ⇄ 参加者および作家 → 環境芸術」などといった、他者の感受性を取り入れた参加型の制作手法を新たに構築していく必要があると考えるに至った。

本論文は、札幌市内を中心に2025年から本格的な活動をはじめた音風景ワークショップ「アクティブ・サウンドウォーク札幌」に関する実践報告である。本ワークショップの基本構想をはじめ、2024年11月に取り組んだプレ事業の内容を整理しながら、身体のかき響きを捉える音風景ワークショップの在り方について考察する。

## 2 研究背景

### 2.1 音環境とサウンドスケープ

サウンドスケープとは「音風景」という意味を持ち、環境の音を単体で個別に対象とするのではなく、それらを一つの総体として捉え直していこうとする思想である。それは、単に音の集合

体としてだけではなく、そこに様々な音が存在する背景や聴取の方法など、多様な側面を考慮しながら全体的に音環境を理解しようとするものである。この思想は、1960年代後半にカナダの作曲家である R. マリー・シェーファー（Raymond Murry Schafer, 1933-2021）によって提唱された<sup>6)</sup>。現実の環境を指す場合もあれば、特にそれが一つの環境として考えられた場合には、音楽作品やテープ・モンタージュのような抽象的な構造物を指す場合もある<sup>7)</sup>。シェーファー以降、サウンドスケープの美的な質を改善していくために「サウンドスケープ・デザイン」と呼ばれる現代音楽の作曲技法に連続した新しい表現領域も確立された。その背景には、産業革命以降、メディアやテクノロジーの発展に伴って、人間社会には実に多彩な音が複雑に混ざり合う音環境が形成されたことが挙げられる。サウンドスケープ思想は、環境の音の捉え方に大きな変革をもたらし、その当時には社会問題にもなっていた騒音の規制に対して新たな視座を与えるものになった。新しく生まれた音が、環境の中に野放図に解き放たれる前にそれらを検討することによって、単に騒音を規制するだけでなく、特定の音を保存しながら未来に向けて魅力的な音環境を作り出すことが試みられたのである<sup>8)</sup>。その結果、都市建設の推進や工業の原料確保などのために失われてしまう運命にあった世界中の自然環境の音をはじめ、歴史的・文化的な音が保存あるいは記録されることとなった<sup>9)</sup>。

日本におけるサウンドスケープ研究は、1986年にサウンドスケープ思想について提言したシェーファーの著書『世界の調律』が翻訳出版されたことが大きな起点と言える。その後、1993年には「日本サウンドスケープ協会」が設立され、音響学や音楽学だけではなく、建築学、土木工学、造園学、生物学、人類学、社会学、地理学、歴史学、教育学など、幅広い領域からサウンドスケープ研究が進められてきた。このような複合領域の研究では、物理的に存在しているものとして「音環境」を、個々人が感じ取っていることとして「サウンドスケープ」を使い分けることもある<sup>10)</sup>。本論文においても、同様に用語の使い分けを行うこととする。

## 2. 2 先行事例

身の回りに存在している「音環境」を個々人が感じている「サウンドスケープ」として捉えていくために、サウンドスケープに関連する様々なワークショップが取り組まれてきた。そこで、日本サウンドスケープ協会の研究活動からいくつかの事例を紹介する。

### （1）サウンド・エデュケーション

サウンド・エデュケーションとは、「身近な環境に耳を傾けるための＜聴く技術＞の回復と育成のために開発された教育活動の総称、サウンドスケープ思想に基づいた独自のプログラムの総称」<sup>11)</sup>であるとされている。シェーファーの著書『サウンド・エデュケーション（新版）』では、最初の課題に「目をつぶって聞こえた音をリストに書き出す」<sup>12)</sup>という取り組みがある。その他には、音を探してみる、音を追いかけてみる、音の違いを考えてみる、音の意味を考えてみる、

音の日記をつけてみる、音を思い出してみる、音だけで表現してみる、身体の中から聴こえる音を書き出す、などといった多様な活動が取り組まれてきた。このような活動を通じて、個々人の感受性を鍛え、見落としていた環境に気付きを与えることで、日常生活や行動に変化が生まれることを狙っている<sup>13)</sup>。

## (2) サウンドウォーク

サウンドウォークとは、屋外で環境の音を聴取・探索しながら歩く活動であり、サウンド・エデュケーションの一つに分類される。特定の環境内を「聴くことに集中して単に歩くこと」を行うのだが、ゆっくりとした歩調で行うこと、複数人で行う場合は前を歩く参加者の足音がちょうど聞こえなくなるくらいの距離を保つことが捕捉されている<sup>14)</sup>。さらに、ガイドとして「スコア」を用いて探索することが求められている。このスコアとは、「聴取者がそこに書かれた道を辿っていくうちに、聞き慣れない音や周囲の音に注意を向けていくように仕組んだ地図」である<sup>15)</sup>。つまり、引率者が事前に感じ取ったサウンドスケープを辿るようにして、参加者は周囲の音環境に耳を開いていくことが意図されている。

その他にも、特定の音環境の響きに耳を傾けてみる活動やそれらを表現する音楽制作、フィールドレコーディング、環境の音を視覚的に表現してみるなど、実に多様なワークショップが取り組まれてきた。

## 2. 3 本ワークショップの特徴

本ワークショップ「アクティブ・サウンドウォーク札幌」では、前述するサウンドウォークを参照しながらも、参加者たちによる複合的な「スコア」を作成してみることを試みた。また同時に、環境内のある対象に自らの身体的な行為を介入させることで、新たな音が発生する可能性のある地点を探索してみることに取り組んだ。従来のサウンド・エデュケーションでは、他者がどのような音を発しているのか、あるいは他者がどのように音を感じ取っているのかという点に重きが置かれており、参加者には「聴き手」としての側面が強く表れているものが多く占めている。つまり、自分以外の他者へ「まなざし」を向けることによって、自らが感じ取っているサウンドスケープを捉えることができるということである。ただし、他者へ直に触れて共振した結果として、環境内に発せられた音に関しては、あまり言及がなされていない。本ワークショップの特徴は、参加者が自発的に音を発すること、すなわち環境と共振する活動を通じて、それぞれの身体内部に広がるサウンドスケープに気づきを与えることを試みた点にあると考える。

### 3 アクティブ・サウンドウォーク札幌

#### 3. 1 実施背景

本ワークショップを構想するにあたり、一般社団法人 AIS プランニング（以下、AIS プランニング）が主催する文化芸術を通じたコ・クリエーション事業「アーティストの創作活動を通じた新たな価値創造支援プログラム」（以下、本支援事業）に応募した。本支援事業は、創作活動費の助成支援だけでなく、コーディネーターによる併走支援を受けられることが特徴であり、新しい挑戦をしていく上で活用すべきだと考えた。応募当初の企画は、サウンドスケープに関する既往研究において「サイレンス」注3）であると筆者が捉えていた「観察するだけでは音を発することのない物質」を対象に、音を発生させる行為を仕掛けていくワークショップであった。2024年9月11日に本企画が採択されて以降、AIS プランニングのコーディネーターたちとワークショップ内容の打ち合わせを重ねていった。その中で、全く新しい試みということではなく、筆者がこれまで取り組んできた芸術実践と親和性の高いプログラムを構想していくこととなった。アーティストとしての筆者は、これまで国内外の様々な環境に赴き、環境内のある対象に自らの身体的な行為を介入させていくことで、新たな音が発生する可能性を探索してきた。また、その結果として生じる音環境の変化を自身のサウンドスケープとして捉え直すことで、インスタレーション・アートを制作してきた。そのため、応募当初の企画では、特定の場所を定めて集中的に活動していくことを構想していたが、参加者たちと札幌市周辺の様々な場所へ赴き、能動的に音環境を変化させていく内容とした。そして、これらのプログラムを「部活動」のように見立て、市民参加型の新しい音風景ワークショップを構想していった。

#### 3. 2 実施概要

本ワークショップでは、筆者が「部長」を務め、参加者が「部員」として活動していく形式を取っている。部長は、特定の環境を歩く道筋のみを示した簡易な地図を作成し、ワークショップ全体の進行を担当する。合わせて、その場に生まれた新たな音を録音する役割も担うことにした。また、本ワークショップの開催場所は「都市の隙間」とすることにした。ここでいう「都市の隙間」とは、緑地や公園など都市環境において自然環境に触れることのできる整備された場所である。特に、札幌市の中心市街地では、今もなお集中的な都市開発が進んでおり、日常生活においてこれらの場所に足を運ぶ機会が減少している傾向にあると感じていた。そのため、本ワークショップを通じて、日常生活の中で認識はしているがあまり足を踏み入れたことのない環境に赴くことによって、新たな音との出会いや気づきを与えることを意図した。

本ワークショップは、①サウンドウォークによる探索、②アクション・レコーディング、③振り返りの会、からなる三つのプログラムで構成している。まず①では、従来のサウンドウォークのように、都市の隙間をゆっくりとした歩調で歩きながら、周囲の音を聴くことに集中して歩く



ことに取り組む。また同時に、自らの身体的な行為を介入させることで、新たな音が発生する可能性のある地点を探索する。次に、サウンドウォークで歩いた道を引き返していきながら各々が探索した地点に立ち寄り、そこで参加者たちによる身体的な行為を介入させる。合わせて、その時に発せられた新たな音を録音していく。最後に、拠点に戻ってから録音した音を振り返り、それぞれの音に独自のオノマトペを名付けてみる。これらのプログラムを通して、ワークショップ参加者は、音環境を「観測者」と「行為者」の両側面から体験し、空間的・身体的な次元でサウンドスケープを捉える「身体的な聴取」体験が生まれることを狙いとした。

### 3. 3 プレ事業の活動報告

2024年11月24日、本ワークショップのプレ事業として、体験入部イベントを開催した(図1)。今回の対象にした精進川は、北海道札幌市南区および豊平川を流れる石狩川水系豊平川支流の河川である。本河川は、1992年から「精進川 ふるさとの川事業」にて再改修され、住宅地の只中で自然に親しめる場所として整備されている<sup>16)</sup>。また、精進湖畔公園は、「都市内の河川を近自然型工法で緻密に再生した点」が高く評価され、2007年度土木学会デザイン賞で優秀賞を受賞している<sup>17)</sup>。以上のことから、住宅地の中にひっそりと存在するこの公園を「都市の隙間」と見做し、参加者たちと歩いてみることにした。

当日は、札幌市平岸地区に位置する「さっぽろ天神山アートスタジオ」<sup>注4)</sup>を拠点に、精進湖畔公園の精進川沿いを歩いた(図2)。当日の参加者は14名となり、小さな子どもから海外在住のアーティストまで幅広い世代の参加が見られた。まず、サウンドウォークを行いながら精進湖畔の先まで30分ほどかけてゆっくりと歩いた。小さな子供たちは雪遊びをしながら、大人たちはそれらの音も含めた周囲の音に耳を傾けながら、新たな音が発生する可能性のある地点を探索した(図3)。次に、精進湖畔の先から引き返していきながら、各々が目を付けていた地点に立ち寄り、身体的な行為を介入させることで環境内に新たな音を発生させた。これらの地点が、本ワークショップにおける複合的な「スコア」の位置付けである。この時には、靴で雪面を擦る音、木や葉っぱを揺らして積雪を落とす音、排水溝や川に雪を落とす音、雪面に倒れ込む音、雪を固める音、川面に靴をつける音など、およそ1時間かけてアクション・レコーディングに取り組んだ(図4、図5、図6、図7)。最後に、拠点に戻って録音した音を参加者たちと振り返る時間を30分ほど設けた(図8)。録音した音声ファイルには、環境内に生まれた新たな音だけでなく、その周囲の音も含まれるように工夫した。このような周囲の音は、一般的なフィールドレコーディングでは「ノイズ」として排除される音である。ただし、本ワークショップにおいては、周囲の音も含めた音環境にオノマトペを名付けてみることを試みた。このように、共通する単純な回答を持たない状態を作り出したことによって、個々人が感じ取ったサウンドスケープの共通点、相違点、参照点を参加者同士で共有し合う時間を創出させた。

レコーディング  
初心者さん、経験者さん  
大歓迎！

参加費無料  
動きやすい服装で

2025 年の本活動は  
毎月 1 回を予定  
参加できる日だけで OK

どなたでも参加可  
※小学生以下の方は、保護者同伴

★体験入部①「精進川を歩いてみる」  
日時：11 月 24 日（日）13 時から 15 時 30 分  
場所：さっぽろ天神山アートスタジオ入り口（屋外）  
（北海道札幌市豊平区平岸 2 条 1 7 丁目 1-8 0）  
・何でも良いので録音ができる機材を持参してください。（スマホ可）  
・当日はさっぽろ天神山アートスタジオ集合・解散となります。  
お問い合わせ：active.soundwalk@gmail.com

アクティブ・サウンドウォーク札幌  
体験入部参加者募集

図1 体験入部の募集チラシ（筆者作成）



図2 当日のルートマップ（国土地理院地図を元に筆者作成）



図3 サウンドウォークの様子（撮影：島名毅）



図4 木を揺らして積雪を落とす音（撮影：島名毅）



図5 靴で雪面を擦り、川に雪を落とす音（撮影：島名毅）



図6 雪面に倒れ込む音（撮影：島名毅）



図7 排水溝に雪を落とす音 (撮影：島名毅)



図8 音を振り返る会 (撮影：島名毅)

### 3. 4 活動のドキュメンテーション

序論で述べた通り、本ワークショップの目的には、サウンド・エデュケーションの役割だけでなく、「音環境 ⇄ 参加者および作家 → 環境芸術」などといった、他者の感受性を取り入れた参加型の制作プロセスを新たに構築していく側面もある。そのため、ワークショップの成果物をどのようにドキュメンテーションしていくのか、ということも重要な要素となる。美術におけるドキュメンテーションとは、映像・写真・素描・文書などによる作品関連の記録を指し、大きく二つに区別される。一つは、美術館、博物館、研究機関などの関連メディアが、それぞれの役割のうちに残す展覧会、制作過程、作品背景などの記録であり、冊子や映像媒体を用いて「作品の記録」として整理される。もう一つは、直接体験が困難な作品を作家に所属するものとして鑑賞者に提供する記録であり、野外で実施する必然性のあるものや、一回性が重視される芸術行為が「記録の作品」として整理される<sup>18)</sup>。本ワークショップの成果物は、主に録音した音声ファイルと独自のオノマトペであるが、活動には後者の特性があると捉え、記録の作品として「アート・ドキュメンテーション」の作成にも取り組むことにした。

アート・ドキュメンテーションを作成するにあたり、プラットフォームには「SoundCloud」と呼ばれる音声ファイル共有サービスを使用した。独自のプラットフォームを立ち上げるのではなく、既存のサービスを活用することで、活動を広く流通させていくことを狙ったためである。また、登録する個々の音声ファイルごとに、サムネイル画像やテキスト情報を挿入できる点にも着目した。2024年12月から「Active Soundwalk Sapporo」というユーザー名を用いて、体験入部イベント時に録音した音声ファイルを公開している<sup>19)</sup>。合わせて、新たな音を発生させた場面とその音を示す独自のオノマトペを描いたデジタルイラストをサムネイル画像として掲載した(図9)。そのことによって、参加者の匿名性を保証するだけでなく、「SoundCloud」上の視聴者においてもどのような情景で収録された音なのかを想像させる余地を意図して作り出した。



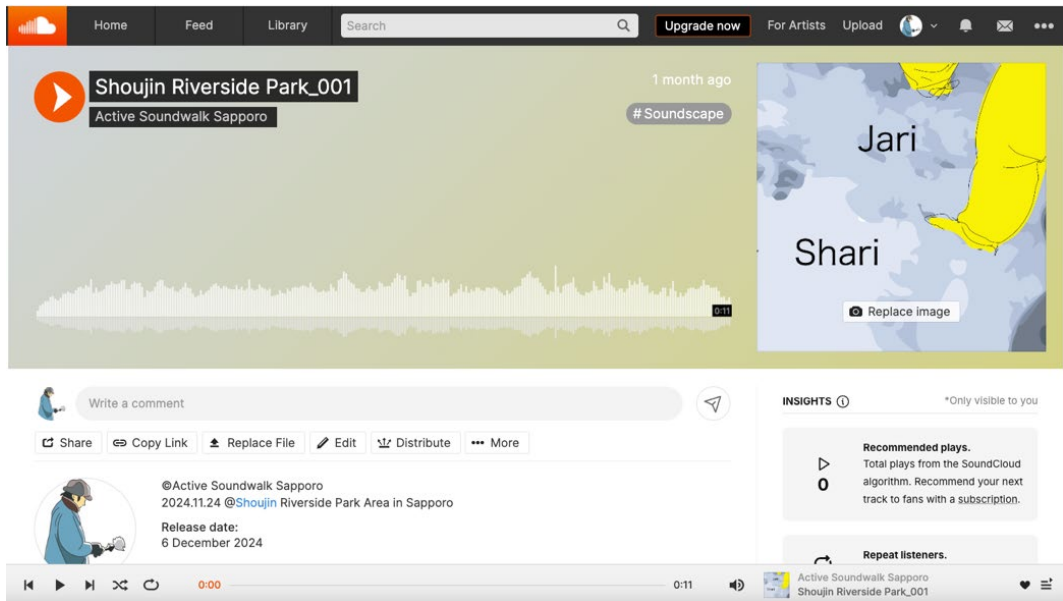


図9 SoundCloud「Active Soundwalk Sapporo」ホーム画面

#### 4 身体の＜響き＞を捉えるサウンドスケープ・ワークショップ

本ワークショップの体験入部イベントを通じて、筆者が個人でサウンドウォークを行う際には捉えることのなかった、いくつかの新しい音に出会うことができた。これまで芸術実践を通じて、自己の身体内部に広がるサウンドスケープを捉えてきたが、本ワークショップでは、他者の身体内部に広がるサウンドスケープにも想いを馳せることができた。その要因の一つとして、本ワークショップのプログラムを通して、他者の「身体の記録」<sup>20)</sup>が共有されたことが挙げられる。身体の記録とは、「自分の目で見て体験し、文献等を調べて理解を深める」<sup>21)</sup>ことを指し、現代の身体を巡る芸術・建築・文化が生成される現場でしばしば用いられる言葉である。本ワークショップにおいては、新たな音を発生させる際の身振り、環境内に発生した音、その音を含めた音環境の多様な捉えられ方に接することで、音を発生させた他者の身体性を追体験できたのではないだろうか。本ワークショップの参加者からは、他者へ向けていた「まなざし」が自分に向けられた時に、自分の身体内部に広がるサウンドスケープを初めて意識することができた。またそのことによって、周囲の音環境に対する認識にも変化が生まれ、自分が発する音と他者が発している音を聞き分けるようになったと感想を頂いた。

身体とは、内と外の「あわい」を感じ取る「器」であり、外的・内的要因による「身体の記録」の積み重なりが、自己の同一性を獲得することに繋がる<sup>22)</sup>。つまり、本ワークショップでは、空間的・身体的な次元でサウンドスケープを捉える「身体的な聴取」体験が生まれたことで、個々

人が感じ取っているサウンドスケープを行為と認識の両側面から経験することができたのではないかと捉えることもできる。もちろん、従来のサウンド・エデュケーションにおいても、同様の効果が得られることは十分に期待できる。ただし、本ワークショップにおいては、参加者が「観測者であり行為者でもある状態」を意図して作り出したことによって、音環境を捉える感受性、すなわち身体内部に広がるサウンドスケープを他者と共有し、改めて自己へと「まなざし」を向けさせる一連のプロセスが成立していたとも言える。以上のことから、参加者が自発的に音を発すること、すなわち環境と共振していく活動を通じて、身体の＜響き＞を捉える音風景ワークショップの一つの在り方を提示することができた。

## 5 まとめと展望

サウンドスケープ思想が提唱されて半世紀以上経った現在、音環境と人間の相互関係は目まぐるしく変容してきた。サウンド・エデュケーションでは、人間が本来身に付けている「光、音、風、香りなどを感じ取る身体感覚」を取り戻し、絶えず変化を続ける周囲の音環境をどのように捉え直すことができるのか、という視点で様々な活動が取り組まれている。一方で、現代の情報化社会を生きる私たちには、電子ネットワークやデジタル化に伴う新しい身体感覚が無意識のうちに備わっている。それは、電子の流れに晒されて通過していくような「どこか透明な身体感覚」である。この両者の身体感覚を重ね合わせた「第三の身体」に応答する表現をしていくことが、現代芸術一般に共通する特徴だと筆者は捉えている。その意味において、サウンドスケープに関連するワークショップの「アート・ドキュメンテーション」を考えていくことは、今後のサウンドスケープ研究における重要な視点になると、本論文を通して考えるに至った。

本ワークショップ「アクティブ・サウンドウォーク札幌」は、未だ試行段階の部分もあるが、2025年には毎月一度の継続的な活動をしていく予定である。このような取り組みを継続していきたい。また、身体内部に広がるサウンドスケープを捉えていくためのより具体的な規範を整えていきたい。また、本ワークショップによって作られていく「アート・ドキュメンテーション」の活用方法についても検討する必要もある。今後も、理論と実践を往還する研究活動を継続し、＜わたしたち＞が感じ取るサウンドスケープの多様な在り方に気づきを与える新たな鑑賞体験を生み出すための制作研究に取り組んでいく予定である。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、本ワークショップの基本構想からプレ事業の実施に至るまで、併走支援して頂きました一般社団法人 AIS プランニングの漆崇博様、小林亮太郎様をはじめ、本ワークショップにご参加頂いた皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 注

- 1) 身体的な聴取とは「音の創造と聴取の緩やかな関係に着目した聴取体験」である。その聴取者は、音環境を「観測者」と「行為者」の両側面から体験し、空間的・身体的な次元でサウンドスケープを捉えることができる。（宮本一行（2024）『音環境と協奏する芸術実践：聴取のための複合芸術研究』博士論文、秋田公立美術大学）
- 2) 環境庁（現・環境省）は、環境芸術を「環境の中において芸術を創ろうとする動き」と定義して、その特徴に次の二つを挙げている。「一つは芸術の環境化であり＜中略＞ もう一つは環境の芸術化」である。＜<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h08/10004.html>> 「第3節 芸術・文化と環境」『平成8年版 環境白書』〔2025年1月10日閲覧日〕
- 3) J. ケージは、音楽における「サイレンス」を次のように定義した。一つは「無音状態ではなく、表現意図のための音でもない、非意図的な音」であり、もう一つは「既に存在している制御できない環境音」である。シェーファーはケージの影響も受けていたことから、おそらくサウンドスケープ思想の背景には後者の定義が援用されている。そのような意味において、サウンドスケープ思想における「非意図的な音」とは、観測者が発する音ではないかと考えることができる。（ジョン・ケージ 柿沼敏江（訳）（1996）『サイレンス』水声社、pp.33-40）
- 4) さっぽろ天神山アートスタジオは、札幌市が保有していた中期滞在宿泊施設「旧札幌天神山国際ハウス」を修繕し、用途を「札幌市のゲストのための宿泊施設」から、創造的活動を行う人を支援する「国際的なアーティスト・イン・レジデンス拠点」へと変更して再出発した札幌市の文化芸術施設である。＜<https://tenjinyamastudio.jp/>>「さっぽろ天神山アートスタジオ」公式ホームページ

## 参考文献

- 1) 宮本一行（2024）『音環境と協奏する芸術実践：聴取のための複合芸術研究』博士論文、秋田公立美術大学
- 2) 宮本一行・船山哲郎（2021）『里山の音風景から導く環境芸術：《Performance on Installation》- インスタレーション作品上でのサウンド・パフォーマンス』環境芸術学会誌（26）、pp.71-78
- 3) 船山哲郎・宮本一行（2023）『残余空間から読み解く環境芸術：展覧会《Outer Edge / 知覚の外縁》における実践と考察』環境芸術学会誌（30）、pp.88-96
- 4) 宮本一行（2023）『土地と身体から紡ぎ出される環境芸術：《共振する躯体》- 流れ橋との身体的対話』環境芸術学会誌（30）、pp.97-102
- 5) クリストファー・スモール 野澤豊一・西島千尋（訳）（2011）『ミュージッキング：音楽は《行為》である』水声社
- 6) レイモンド・マリー・シェーファー 鳥越けい子・庄野泰子・若尾裕・小川博司・田中直子（訳）（2006）『世界の調律：サウンドスケープとはなにか』平凡社ライブラリー
- 7) 同上 P.558

- 8) 同上 p.558
- 9) 鳥越けい子 (1997) 『サウンドスケープ：その思想と実践』 日本音響学会誌 (53-12)、pp.964-971
- 10) 平松幸三 (2022) 『サウンドスケープの定義をめぐって』 日本サウンドスケープ協会誌 (22)、pp.40-61
- 11) 日本音楽教育学会 (編) (2004) 『日本音楽教育辞典』 音楽之友会、pp.393-397
- 12) R. マリー・シェーファー 鳥越けい子ほか (訳) (2009) 『サウンド・エデュケーション (新版)』 春秋社、p.182
- 13) 力石泰文・土田義郎 (2000) 『サウンド・エデュケーションの構築に関する研究：既往教育プログラムの分類・整理』 サウンドスケープ (2)、pp.9-14
- 14) 前傾 6)、pp.302-303
- 15) 前傾 6)、pp.303
- 16) < [https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen\\_keikaku/kluhh40000000ny8-att/kluhh40000000o1b.pdf](https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen_keikaku/kluhh40000000ny8-att/kluhh40000000o1b.pdf) > 「北海道における河川事業の紹介」 札幌開発建設部河川計画課、pp.17-29 [2025 年 1 月 10 日閲覧日]
- 17) < <https://www.jsce.or.jp/committee/lsd/prize/2007/works/2007n2.html> > 「優秀賞：精進川～ふるさとの川づくり～(湖畔公園区間)」 土木学会デザイン賞 2007 [2025 年 1 月 10 日閲覧日]
- 18) テオドール・アドルノ 大久保健治 (訳) (2007) 『美の理論』 河出書房新社
- 19) < <https://soundcloud.com/wbdcqyfj4ud> > 「Active SoundWalk Sapporo」 SoundCloud アカウントページ
- 20) 大西若人 (2024) 『ART とカラダと現代建築』 現代企画室
- 21) 同上、pp.288
- 22) 同上、pp.310-321